フィンドレー大学奨学生レポート１月

「てんやわんや」

新年祝賀 in アメリカ

新年の祝い方というのは、文化の違いが顕著に現れる一つのイベントであります。アメリカに来る前は、ドラマ・映画から形成された頑固なステレオタイプにより、アメリカ人は、新年を迎える際にキスをするものである、と考えていました。若干、武者振るいのようなものを感じていたのも事実です。また、日本以外の国で、新年を迎えることが初めての経験だったため、私にとってすべてが新鮮でした。

それで、実際、私が何をしたかというと、2 年前の紅白歌合戦をバックグラウンドミュージックに据え、大晦日にお雑煮を食べました。なぜなら、NBO で日本語通訳として働く方が、大晦日のお雑煮食事会に招待してくださったからです。そして、淡々と会話を楽しみながら、食事を楽しんでいたところ、雰囲気だけでも味わおう、という趣旨で、2 年前の紅白歌合戦のビデオを用意してくださったのです。私は、2 年前の一年の総決算に耳を傾けながら、必死にお餅をお箸でつつきました。まるで、大晦日だけ日本に一時帰国した心地でした。独立性の強いアメリカ社会で摩耗した私の心に、久しぶりに安息を与えてくださいました。そして、新年を迎える瞬間は、アメリカの新年を迎えるスタイルの定番である、NY のタイムズスクウェアにおける年越しの興奮を、正方形のテレビ越しに眺めていました。数人の日本人の友人がタイムズスクウェアで年越しを体験しているということを思い出したため、私の顔には、若干の苦味が映し出されていたことでしょう。

▲2012 年最後の晩餐

ただ、一番、驚いたことは、アメリカの方々が、家族と過ごす時間を大切にしているという点です。なぜなら、彼のご自宅には、ボードゲーム用の本棚があり、その本棚を埋め尽くす、無数のボードゲームが用意されていたからです。また、私と同様に招待されていたアメリカ人の方は、説明を受けずとも、ボードゲームのルールを理解しており、さらに、己の経験から導かれた必勝方法を各々のゲームボードごとに持ち合わせていました。これは、サンクスギビング、クリスマスといった休日を家族で過ごすアメリカな

らではの文化だと感じました。ふと、私の家庭を思い浮かべたときに、家族で卓を囲み、ボードゲームに熱中した記憶が、遠い昔のことであることに思い当たりました。思春期を通りこした後、家族一丸となってなにかに没頭したことがなかったのです。そして、私は、日本に帰国したら、まずボードゲームを購入することを誓いました。結局、私たちは、食後にシークエンスとファーミングというゲームを楽しみました。私は、ボードゲームのプロフェッショナルであるアメリカ人の方々の出方、意見を拝聴し、おそるおそるコマを進めていたのでした。

新学期

1 月の第二週目から、フィンドレー大学で新学期である 2013 SPRING が始まりました。先学期、英語集中クラスである IELP を取っていた私は、あることに気づきました。それは、英語が学問ではないということです。たしかに授業を通し、英語の文章の書き方、英語でのプレゼンテーションの仕方、英語の論文の読み方などを学んでいたのですが、それらはすべて、何かを英語で学ぶための道具に過ぎないことを半年間で悟りました。そのため、今学期からは、大学の学部の授業を受講することを決意しました。当初、私は、日本の大学で学んだことのあるプログラミング、数学の授業を取ろうと考えていたのですが、一般教養、つまり、リベラルアーツの大切さに突然襲われ、進路を変更しました。その結果、いままで日本で受講したことがなく、しかし、興味があり、また、芸術の要素も含み、かつ、定員がオーバーしていない穴場のような授業、という要点で受講する科目を絞っていきました。すると、ある 4 つの授業が浮かび上がってきました。それは、天文学（astronomy）、地質学（geology）、ミクロ経済学（micro-economics）、演劇（acting）です。今学期の時間割は以下の通りです。

<table>
<tr><th>月</th><th>火</th><th>水</th><th>木</th><th>金</th></tr>
<tr><td>Astronomy</td><td></td><td>Astronomy</td><td></td><td>Astronomy</td></tr>
<tr><td>Economics</td><td rowspan="2">Geology</td><td>Economics</td><td rowspan="2">Geology</td><td>Economics</td></tr>
<tr><td>Acting</td><td>Acting</td><td>Acting</td></tr>
<tr><td></td><td rowspan="2"></td><td></td><td rowspan="2"></td><td></td></tr>
<tr><td></td><td></td><td></td></tr>
<tr><td colspan="5">Internship in NBO</td></tr>
</table>

▲新学期の時間割

学部の授業を受講するようになってから、気づいた点がいくつかあります。まず一つ目は、生徒と教員の授業に対する姿勢です。第一回目の授業時に、教員の方がその授業についてのシラバスを配り、その授業について説明するのが通例です。ここで、驚いた

のが、すでにテスト範囲とテスト日程が提示されているという点です。私が通っていた大学の学期末テストでは、テスト範囲・日程は、テスト開始の 2 週間から 1 週間前に提示されるのが普通でした。そのため、学期開始時に、学期終了時のビジョンが描けるということに驚きました。また、テスト日程・範囲だけではなく、成績の付け方が、シラバスに詳細に記載されていました。成績を導き出す計算式が記載されているほどです。このことから、教える側にたつ教員の方々が授業に対して、力を注いでいるということが伺えました。一方、生徒はというと、彼らも同様に真剣です。皆が講義内容に真剣に耳を傾け、舟をこぐ生徒や内職をする生徒がいません。周囲の生徒がこのような姿勢で望んでいるため、その環境に身を置く私自身もそうせざるを得ません。

二つ目は、授業時間です。私が通っていた日本の大学では、通常の科目（実験などの特殊科目以外）ですと、一つの科目につき、90 分の授業が週に一度でした。一方、フィンドレー大学の授業の時間は、一つの科目につき、月曜日・水曜日・金曜日の週 3 回の 50 分間の授業、火曜日・木曜日の場合、75 分の授業が週 2 回です。90 分の長時間の授業を週に一度行うという日本の教育システムと比較して、とても学習の効率がよいことに気づきました。なぜなら、授業が小分けにされているため、教員の立場からすれば、課題が出しやすいからです。また、生徒の立場からすれば、同じ内容の授業を週に 2 度、3 度繰り返し受講するため、否応無しに授業内容が頭に残るからです。この点は、アメリカの教育の優れた点だと思います。しかし、教員側の負担が単純計算して日本の 2 倍ほどになります。これが、アメリカの教育の授業料が他国と比較して、高額である理由だと推測します。

三つ目は、教科書の高価さです。日本では、大学の授業で使用する教科書は比較的高価なものであっても、$ 30～40 であります。また、授業によっては、教科書を使用せず、教員により作成されたプリントに沿って授業を進めていく場合もあります。特に、基礎科目の場合はこの事実が当てはまります。一方、アメリカは基礎科目の授業であっても、教科書の値段がとても高いのです。平均 $ 120 ほどではないでしょうか。別に、厚みや光沢が格段にあるわけでもありません。そのため、学生たちは、授業開始時に中古の安価な教科書を求めて奔走する傾向にあります。これは、たしかに、環境に良い影響与えているかもしれません。なぜなら、中古の教科書が多く使われることで、新しい教科書を発行する必要がそれほどないからです。もしかしたら、中古の教科書が出回りすぎて、新品の教科書の需要が減っているからかもしれません。卵が先か、鶏が先か、という問題に似ていますが、いずれにせよ、これはアメリカ教育のよくない点であると思います。なぜなら、高額の授業料に加え、高額の教科書を買わなければいけないため、学生、学生の家族に大きな負担を与えているからです。この大きな負担により、アメリカの教育は本当に優れた学生を失っている可能性があると思います。